様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５３１０８２

研究課題名（和文）ネットいじめの実態と学校の「荒れ」との関連をめぐる実証的研究

研究課題名（英文）The analysis of cyber-bullying and its backgrounds indirection with school violence.

研究代表者
原　清治（Hara, Kisoharu）

佛教大学・教育学部・教授

研究者番号：２０２７８４６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：１．中学校・高等学校を問わず、ネットいじめの要因として「リアルの世界でいじめられた経験の有無」「いじられキャラであるかどうか」が強く影響していることが明らかとなった。ネットでのいじめと現実世界のいじめの被害者は同一であることが多く、生徒指導上の課題であるといえる。
２．高等学校でのネットいじめの特徴として、進学校と進路多様校ではネットいじめの内容に違いが見られ、進学校ではLINEでのさらしなどの「いじりの延長」、進路多様校では特定個人間でのメール等の誹謗中傷が多く見られた。
３．ネットいじめの啓発活動はケータイ等の所有ではなく、友人や保護者との人間関係を見直すきっかけを提供している。

研究成果の概要（英文）：This analysis showed three important facts from the big survey.Those are as follows (I separated two types of bullying in this paper. One is real bullying that is to say face to face bullying. The another is cyber-bullying that is occurred in SNS tools; with cell phone or Internets and so on.)
1. Both real bullying and cyber-bullying have the some phenomena. That is to say two types of bullying are on the same field in the other word the victim of real bullying is also that is in the cyber-bullying. 2. Particularly in high schools the cyber-bullying can be divided into 2 types. In competitive high schools cyber-bullying is shown as a jest (Iziri in Japanese), but in non- competitive high schools the cyber-bullying is seen of direct attack to the victims with ill words. 3. The teachers and parents make the students find the importance of friendship with others. That is to say to warmup the social capital will be the best solution in this phenomena.

研究分野：教育社会学

キーワード：ネットいじめ

１．研究開始当初の背景

子どもたちの間でインターネットやケータイ電話を利用したいじめが流行している。筆者を代表とした研究グループは、継続的に京都府下および京都市内の小・中・高等学校において携帯電話利用とネットいじめに関する調査を実施し、（2008 年社会安全研究財団一般助成/2009～11 年文部科学省科学研究費基盤研究（ｃ）21530895/2010～11 年電気通信普及財団一般助成）これまで以下に代表されるような知見を得てきた。

(1)京都府下の小学生のケータイ所持率は32.1%であり、所有開始時期は小学校 4 年生からが急激に上昇し、それは通塾(一部、習い事を含む)の開始時期と符合すること。

(2)ネットいじめ被害・加害双方にケータイの利用頻度、とりわけ 1 日あたりのメール送信回数と強い相関がみられること。

(3)性別によるネットいじめの相違を比較した場合、女子においてとりわけネットいじめの経験があると答えた割合が高くなること。

(4)ネットいじめの被害と加害は強い相関関係（r=0.287、１％水準有意）にあり、ネットいじめの被害者となった児童生徒が加害者に転じやすいといった可逆性をもった関係となっていること。(*『ネットいじめはなぜ痛いのか』ミネルヴァ書房（2011）に所収*)

(5)ネットいじめの被害者は小学校から中学生にかけて、学力が「上昇」したり「下降」した子どもにおいて被害が多いこと。(*「ネットいじめの実態とその背景」『現代のエスプリ第 526 号』（2011）に所収*)

(6)ネットいじめの被害は家庭でのネットルールによって多くの部分を抑止できるが、加害についてはネットルールによってその問題を抑えることは難しいことなどである。

以上の結果から、ネットいじめはこれまでのいじめとは異なり、その背景となる要因には学力（コンピューターリテラシーを含む学力や学力移動など）や家庭的背景（通塾や子どもの教育への関心など）が大きいことが明らかとなった。それは、欧米におけるいじめ（ネットいじめを含む）の要因として家庭の経済的状況が劣悪であることや、人種の違いがその要因として大きいことに対し、わが国ではそうした要因の影響は受けにくいことと対比できる。

本研究ではこれまでの量的調査の知見をもとに、①近畿圏にあるいくつかの地域を選定し、近年急増している暴力行為や授業妨害の頻度とネットいじめにどのような因果関係があるのかを精緻に分析すること、その結果をもとに②ネットいじめを子どもたちの「荒れ」と関連付けてどのように抑止すればよいのかという新たな生徒指導上の観点を提供することを目的としている。

２．研究の目的

いじめはこれまでにも子どもたちや社会の様態にあわせてさまざまに進化しており、今日では「匿名性」を特徴とするネットやケータイを利用したいじめが多く発生している。

本研究はネットいじめの発生率と近年急増している暴力行為や授業妨害の頻度とネットいじめにどのような因果関係があるのかを精緻に分析し、子どもたちの「荒れ」を抑止するための新たな視点を提供することを目的としている。

３．研究の方法

研究方法は主に以下の３つの方法による調査・分析を行った。

１）平成 24 年度中に実施した京都府下の中学生および高校生約 800 名を対象としたアンケート調査の実施

２）平成 25～26 年度中に新たに 2400 名の中学生および高校生を対象としたアンケートの実施

３）平成 27 年度に大津市の小中学生を対象とした悉皆調査を実施。サンプル数は小学校 36 校 18,839 名、中学校 18 校 8,759 名（滋賀県大津市いじめ対策推進室より）。

４）平成 24 年度より調査および生徒への啓発活動を行っている A 中学校の全生徒の推移データをもとに、啓発活動の効果を測定

４．研究成果

１）平成 24 年度調査より明らかになったのは以下の３点であった。

・ケータイの利用状況と利用頻度については、地域差を確認することができる。

・調査地域で発生している暴力行為の発生件数と携帯ゲーム機の利用との相関関係が認められた。

・ケータイ利用、携帯ゲーム機、暴力行為の発生件数には強い相関関係が見られた。

これらの結果から、とりわけ暴力行為の発生件数の多い中学校においては、日常生活における生徒指導の重要性を指摘することができる。仮想空間上の「暴力」が現実世界の暴力と相関がみられることを指摘できた。

２）平成 25 年度調査より明らかになったのは以下の７点である。

・学力上位校におけるケータイ所有率は９割を超えるが、使用開始時期は中学以降が７割近くを占め、高校に入学してから使い始めた生徒がその他の学校よりも多い。

・twitter、facebook、LINE、youtube の使用率は学力上位校がその他の学校よりも高い。

・ネットに関するルールを決めていない生徒は学力上位校ほど多く見られる。しかし、それがネットいじめの有無に影響を与えていない。

・学力上位校では学力の高さが一定程度ネットいじめを抑止している可能性がある。
・高校生のケータイの種類によってネットいじめの被害に差は出ないが、使用開始時期が早いほど被害に遭いやすい。
・ネットに関するルールの有無によってネットいじめの被害に差は出ておらず、高校生ではネット利用の制限を設けることによって被害を減じることが難しい。
・ネットいじめの被害者は固定のグループで遊び、面と向かって話をしたい高校生がいる。一方で、ケータイやネットでの接触が多く、友だちが少ないと感じている高校生も被害に遭っていることが明らかとなった。

３）平成 26 年度中に明らかになったのは以下の３つである。
・中学生に注目すると、ケータイやゲームの所有率、ネットいじめの発生率において、地域間の格差はほとんどなく、ネットいじめの相関関係にあるのは「いじめられっ子」かどうかであり、「いじられキャラ」がネットいじめの被害であることが多い。また、都心部の中学生においては、「いじられキャラ」「ケータイの所有開始時期」「小学校が荒れていた」などが、ネットいじめの要因になっていた。
・高校生調査では、「ケータイの所有率」「所有開始時期」「ケータイに関するルールの有無」が高校階層によって有意差があり、学力中上位校は中学時代に、学力下位校は高校時にケータイに関するモラル教育が有効であることが明らかとなった。一方で、学力下位校では家庭でのルールがない生徒が多く、学校での取り組みが重要となることが指摘できた。
・ネットいじめの「発生率」は高校階層によってそれほどの違いは見られないが、その内容は大きく異なり、学力上位に個人情報や画像流出などの「さらし」が多く、学力下位ではブログやメールによる個人攻撃が多くなり、学力中位はネットいじめの被害内容が少なくなることが明らかとなった。

４）平成 27 年度中に明らかになったのは以下の２つである。
・ネットいじめの発生率を学校ごとに分類した場合、同一中学校区であってもネットいじめの発生率が高い小学校と低い小学校が混在しており、それらの児童が中学校に進学した場合、必ずしも発生率はその中間を示すことなく、むしろ発生率がより高くなってしまう学校が 16 校中 7 校存在していたことが明らかとなった。また、ネットいじめの発生率が高くない複数の小学校が中学校に進学した時に、中学校での発生率が突如高くなるケースも 5 校存在していたことが明らかとなった。
・３年間啓発活動を行った A 中学校では、ネットいじめに関する意識の変化をパネル化し、啓発効果についての検討を行った。その結果、ネットいじめに対する啓発の効果は所有の有無やアプリの使用時間に直接的な効果を持たなかった一方で、友人関係や親子関係を見直し、改善する傾向が認められた。「友人に悩みを相談する」「困ったことがあれば面と向かって話をする」「学校の出来事を保護者に話す」といった項目で「そう思う」と答える生徒が有意に増えていることが明らかとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５　件）
①原清治、学力論の変遷と高校生に求められる力、月刊高校教育、査読無、第 48 巻、2015 年、pp.26-30
②原清治・浅田瞳、高校階層とネットいじめの実態に関する実証的研究、佛教大学教育学部学会紀要、査読無、第 14 号、2015 年、pp.1-13
③原清治、複雑化する生徒指導諸課題の特質、月刊高校教育、査読無、第 47 巻、2014 年、pp.22-25
④原清治、ネットいじめと学校、青少年問題、査読無、第 654 号、2014 年、pp.18-25
⑤原清治、いじめ問題はなぜ解決できないのか、児童心理、査読無、第 972 号、2013 年、pp.13-21

〔学会発表〕（計１４件）
①原清治・浅田瞳・堀出雅人「ネットいじめの現状と啓発効果に関する実証的研究」日本子育て学会第７回大会（招待講演）、2015 年 11 月 29 日、甲南女子大学（兵庫県・神戸市）
②原清治・浅田瞳「ネットいじめの実態に関する実証的研究（Ⅲ）」関西教育学会第 67 回大会、2014 年 11 月 15 日、佛教大学（京都府・京都市）
③原清治「How Do the Teachers Face for the Issue of Cyber-Bullying?」JUSTEC2015（国際学会）、2015 年 9 月 15 日、SpringHill Suites Pensacola Beach（アメリカ）
④原清治・浅田瞳・堀出雅人「ネットいじめの要因と実態に関する実証的研究（Ⅲ）」日本教育学会第 74 回大会、2014 年 8 月 30 日、お茶の水女子大学（東京都・文京区）
⑤浅田瞳・原清治「ネットいじめの実態に関する実証的研究（Ⅱ）」関西教育学会第 66 回大会、2014 年 11 月 16 日、滋賀大学教育学部（滋賀県・大津市）
⑥原清治・浅田瞳・山内乾史・堀出雅人「ネットいじめを規定する要因に関する実証的研究」日本教育実践学会第 17 回大会、2013 年 11 月 2 日、鳴門教育大学（徳島県・鳴門市）
⑦原清治・山内乾史・浅田瞳・堀出雅人「ネットいじめの要因と実態に関する実証的研究（Ⅱ）」日本教育学会第 73 回大会、2014 年 8 月 24 日、九州大学貝塚文系キャンパス（福岡県・福岡市）

⑧原清治・浅田瞳「ネットいじめの実態に関する実証的研究」関西教育学会第 65 回大会、2013 年 11 月 16 日、和歌山大学（和歌山県・和歌山市）
⑨原清治「現代におけるいじめの特徴とは何か」関西教育学会第 65 回大会公開シンポジウム、2013 年 11 月 16 日、和歌山大学（和歌山県・和歌山市）
⑩浅田瞳・原清治「生徒指導上の問題行動とネットいじめの関係に関する実証的研究」日本教育実践学会第 16 回大会、2013 年 11 月 3 日、岡山大学（岡山県・岡山市）
⑪原清治・山内乾史・浅田瞳「ネットいじめの要因と実態に関する実証的研究」日本教育学会第 72 回大会、2013 年 8 月 29 日、一橋大学（東京都・国立市）
⑫原清治・浅田瞳「ネットいじめの実態に関する実証的研究（Ⅳ）―生徒指導上の諸問題との関連に注目して―」関西教育学会第 64 回大会、2012 年 11 月 10 日、奈良女子大学（奈良県・奈良市）
⑬原清治・浅田瞳「ネットいじめの要因に関する実証的研究（Ⅲ）」日本教育実践学会第 15 回大会、2012 年 11 月 4 日、神戸市産業振興センター（兵庫県・神戸市）
⑭原清治・浅田瞳「生徒指導上の荒れとネットいじめに関する実証的研究」日本教育学会第 71 回大会、2012 年 8 月 25 日、名古屋大学（愛知県・名古屋市）

〔図書〕（計　1　件）
山内乾史、原清治他『学修支援と高等教育の質保証Ⅰ』学文社、198 頁、2015 年。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
原　清治（HARA　KIYOHARU）
佛教大学・教育学部・教授
研究者番号：20278469

(2)研究分担者
山内　乾史（YAMANOUCHI　KENSHI）
神戸大学・大学教育推進機構・教授
研究者番号：20240070

浅田　瞳（ASADA　HITOMI）
華頂短期大学・幼児教育学科・講師
研究者番号：80454859

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：